

龍源寺の歴史について(一〇)

松原 泰道

大正八年ごろの当寺の檀家戸数は三十二戸に過ぎなかつたので、祖来和尚の願心や総代中澤六之助氏の熱意にも拘らず必要経費を募ることは容易ではありません。加えて大正十二年の大震災で檀信徒のほとんどすべてが罹災されて寄附の勧募はついに中止しなければならなかつたことが記録に残っています。

寺は、震災でひどくゆがみましたが、幸い倒れることもなく、地震による火災も逃れましたが、引続いた例の暴動のデマに脅えた附近の人々が本堂や庭になだれこんだので建具や什物がひどく荒らされました。また罹災者の避難所に指定されたので遠く芝浦あたりから負傷した従業員がタンカで運ばれて来るなど一時は大へんな騒ぎ

でした。

当時の東京市当局が「水道を敷いて、井戸は非衛生であるから即刻埋没するように」と再三の指令でしたが、祖来和尚は持ち前のガンコさから応ぜず、かえって井戸がえやら井戸ワクを新たにしました。その数日後に大地震があつたので、幾百の避難者は大助かりでした。

それにも増してうれしいことは、僅かのお檀家とはいえ、三十二戸中、倒壊一一、火災一八の罹災にもかかわらず、一人の災死者もなかつたことです。それを知ると祖来和尚は大喜びで仏天のご加護と各ご先祖のおかげであるとして、渋谷東北寺その他にある龍源寺墓地の倒れたりゆがんだ墓石を石工を頼んで修理にあたりました。

このようなことで、本堂・庫裡改築工事は中止と決定しなければなりません。祖来和尚と中沢六之助氏ら総代衆の残念そうな

面影が、その頃中学生だった私の心に深く印象づけられています。

然し、震災と避難者のため破損したり荒らされたところを根本的に修理するために、その立退き所を兼ねた書院（現在の二階建）一棟を新築することになりました。

本堂庫裡修繕の経費二、九八五円七四銭也は檀信徒諸氏の浄財に仰ぎ、新築書院の経費四、〇一八円八十九銭也は住職祖来和尚の個人建立として竣工の上は龍源寺へ寄附することに決定。法類、総代等当事者の同意署名を得、宗派機関や諸官庁の許可を得たのが大正十五年の九月三日で、その廿六日から書院新築にかかり同年の十二月廿三日に落成、修繕工事は翌昭和二年一月末日に完了しました。